前立腺癌の診断と治療

—司会の言葉—

京都府立医科大学泌尿器科学教室（主任：渡辺　泱教授）
渡　辺　　泱

SYMPOSIUM I: DIAGNOSIS AND TREATMENT OF PROSTATE CANCER: CHAIRMAN'S ADDRESS (2)

Hiroki WATANABE
From the Department of Urology, Kyoto Prefectural University of Medicine

New topics on modalities of diagnosis and treatment for prostatic cancer were discussed by four symposists.

(Acta Urol. Jpn. **43**: 445, 1997)

Key word: Prostatic cancer

前立腺癌は，今我が国で最も増加している癌である．すなわち，黒石の予測によれば，我が国の前立腺癌死亡は2015年には14,000人弱に達し，1990年の実測値に比べた増加率は3.9倍で，これはあらゆる臓器の癌のうち最高である．因みに第2位は胆嚢胆管癌，第3位は肺癌（男子癌中で）である．またこの増加率を世界各国のそれに比べると，我が国はメキシコに次いで世界第2位である．すなわち我が国の前立腺癌は，ほかのどの臓器にも増して，またほかのどの国にも増して急増中なのである．米国では，1995年から前立腺癌罹患者数は男子癌中第1位となり（死亡者数では肺癌についで第2位），また北欧諸国ではずっと以前から死亡者数でも第1位であるという事実は，泌尿器科医なら誰でも一応の知識として理解しているであろうが，現実に我が国で，今から20年後にはこの癌が国益を大きく損じるきわめて重要な癌となるであろうことを，はっきりと認識している泌尿器科医がどのくらいいるだろうか。私たちの自然史の研究によれば，前立腺に1個の癌細胞が発生してから患者が外来に現れるまで，平均40年の年月が必要である．2015年のための癌対策は，今すぐに始めてもすでに手遅れとさえいえる．このシンポジウムでは，不十分ながらも現在我々が手にしている癌対策のいくつかを，例示することができたら幸甚である．

(Received on February 10, 1997
Accepted on March 31, 1997)